

## 全曹青第4期会長

# 故・桑原大宗老師を

## 偲んで

静岡県 栄林寺住職 櫻井孝順  
 (第4期事務局・第5期会長)



曹洞宗青年会第4期会長桑原大宗老師の御遷化にあたり、謹んで哀悼の意を表します。

師は、昭和57年青年会創設期から組織拡充に向かう時期での就任、又前年には大本山永平寺二祖國師大遠忌奉修にあたり、青年僧侶結集・各管区の連携・各曹青会がそれぞれ会員拡大や地方色豊かな事業が展開されようとする時期でもありました。会長就任にあたり、

り、スローガンに「みずからの行履をもとめて」を掲げられました。組織充実を図る為には、全曹青が時代の要請に応えるべき役割を明確にすること・各曹青会が地方の文化と禅の融合を図ること・青年僧個々そのまま教化者である以上に地域における社会的責任を担う若者として求められることに自覚を促すことを訴えられました。教化者として人材の意識と連帯が組織の継走に欠かせないものと考えられておられました。そして事業展開では、創始の精神を礎に歴代の諸役員と机を囲み、明日の全曹青を語る討論会の開催、更に常任講師の助言を得て『曹青通信』の改編・各種行事の教化テキストの発行、地方曹青会の活動を網羅する『曹青のあゆみ』など広報活動の充実と心された功績は大なるものがありました。師の言動に多くの共鳴を受けた根底には、昭和52年新潟県四宗務所の青年僧侶を取りまとめ、新潟県曹洞宗青年会の設立に尽力され、初代会長を務められた

ことです。特筆すべき事業は、子供禅の集い運動として『坐・ハンダリ』は体験学習の中で子供達へ坐禅への親しみ、食をいただく喜び、感謝を見出すユニークな事業であったと思われまます。

師は、全曹青の会長になられてからも檀務や地域社会奉仕活動を常に念頭に置かれ、午前中は斉経に廻られ、会議の時間に遅れることもしばしばありましたが、笑顔で手を挙げて「どうも、どうも」と親しみのある方でした。禅文化事業で思い出すことは、大雄山最乗寺の「青年授戒会」のことであります。師は、瑞光寺(新潟県新潟市)副住職の立場を踏まえ、自ら会長の任であたるべき引請師を副会長清涼寺住職故村瀬信行師に譲

られたことは、宗侶として威儀とわきまえられておられたと思います。

この度も本葬儀翌日に修行される新潟青年授戒会の引請師をおつとめされる矢先の遷化。何の因縁でありましようか。

師の故郷である新潟ゆかりの良寛様。良寛会の重鎮であった師は、良寛様没後150年追悼の法会をおつとめされ、良寛様の遺徳を全国に知らしめられました。本葬儀の当日(5月29日)『新潟日報』新聞紙面の良寛詩は

春の野に若葉摘みつつ雉子の声  
 聞けば昔の思ほゆらくに

と記されておりました。遠い昔のあれこれの思い浮かべ、お棺の周りに集まった10人の孫たちと和やかな日々をお慕いつつ…合掌。



(上)全曹青会長当時、演台にて  
 (下)平成16年大本山永平寺拝登の折に  
 写真提供:新潟県瑞光寺様(上下共)